

一 「戦隊」の意味

前号では「気になる言葉⑪ オタク／オタク文化」を取り上げたが、その中でも「戦隊もの」は日本独自のものと言ってよいだろう。もともと「戦隊」とは『広辞苑』(二〇〇八)によれば「軍艦二隻以上、または軍艦および駆逐隊(または潜水隊)によって編成した部隊」(二六〇一頁)である。基本的には複数の編成構成をとり、武器を装備しているという二点の特徴ということになるのか。

二 戦隊もの

戦隊ものがブームになったのは『秘密戦隊ゴレンジャー』(一九七五)からと言われている。スーパー戦隊という名称が一般に定着したのは『太陽戦隊サン

ンバルカン』(一九八一)であったようだ。一般に戦隊ものの最も大きな特徴はチーム編成であること、特別な能力(強化スーツなどを装着している場合も含む)を備え、個別の武器を持っていることだ。これに戦士特有の必殺技などを駆使している場合も多い。また、ここで注目しておきたいのがその人数である。通常は「ゴレンジャー」からもわかるように五人編成が基本のようである。

三 チーム編成の構成

よく言われるが、五人編成の原点はおそらく歌舞伎の通称『五人白波男』であろう。二代目河竹新七(黙阿弥)『青砥稿花紅彩画』(あおとぞうしはなのにしきえ)(二八六二)のことである。白波とは『後漢書』から由来し、盗賊の意味である。

五人男にはそれぞれモデルとなった実在・架空の人物がいることが知られている。

日本駄右衛門、弁天小僧菊之助、忠信利平、赤星十三郎、南郷力丸

弁天小僧菊之助は女装の美男子の設定になっている。



一見関係のないようにも思えるが、現在放映中の『海賊戦隊ゴーカイジャー』(二〇一〇)はスーパー戦隊が海賊という設定になっているが、モデルとなった

ものが盗賊の『白波五人男』とすれば、あながち設定としては先祖がえりということになる。

編成人数から言えば、ステイブ・スピルバーグにも大きな影響を与えた黒澤明監督『七人の侍』(一九五四)も念頭に入れておきたいところだ。五人にしても、七人しても編成上奇数はまさしく絵になりやすい構図となる。

吉田竜夫原作／土屋啓之助他監督『忍者舞台月光』(一九六四)は月光、月輪、名月、月影、三日月を中心にスタートする。三日月の紅一点型。同じ忍者を利用した横山光輝原作／倉田準二他監督『仮面の忍者 赤影』(一九六七)では、赤影、白影、青影の三人編成である。アニメの忍者物では白土三平原作／小林俊雄監督『忍風カムイ外伝』(一九六九)、伊達勇登監督『NARUTO 疾風伝』(二〇〇二)などもある。編成人数としては滝沢馬琴『南総里見八犬伝』(一八一四—一八四二)では八人、また、歴史上の人物を後

世の人が新たなヒーロー像として尼子十勇士、真田十勇士ではもちろん十人となる。これらは明治晩年から大正時代に出版された立川文庫によって書き講談として出版されたもので定着してことになる。

特に真田十勇士はたびたび登場する機会も多いので、立川文庫の十人を紹介しておきたい。

猿飛佐助、霧隠才蔵、三好清海入道、三好伊三入道、穴山小介(穴山小助)、由利鎌之助、笈十蔵、海野六郎、根津甚八、望月六郎

四 紅一点型の戦闘美少女からチーム編成へ

日本のマンガ／アニメにおけるヒロイン像の変遷については斉藤美奈子『紅一点論』(一九九八)と斉藤環『戦闘美少女の精神分析』(二〇〇〇)に詳しく論じられているが、ここでは戦隊ものにおける紅一点型の戦闘美少女から少女戦隊ものへの変遷について

簡単に注目しておきたい。

ここには三つの大きな流れがある。第一は日本のマンガ／アニメの流れとして少女(女性)が単独あるいは紅一点型として活躍する例が比較的早くから登場したことだ。これは現実ではできないことをマンガ／アニメの世界で実現したということにある。『魔法使いサリー』(一九六六)、『リボンの騎士』(一九六八)『ひみつのアッコちゃん』(一九六九)の三作品(カッコ内はテレビアニメ放送開始年)はその先駆的な役割を果たしている。第二はおもに実写版に代表されるが『秘密戦隊ゴレンジャー』(一九七五)にはじまる戦隊ものに登場する女性戦士である。当初はピンクに代表される女性戦士も現在は男性戦士三人、女性戦士二人編成が定着しつつある。第三は女子だけのチーム編成をとった戦隊ものである。その代表は『美少女戦士セーラームーン』(一九九二)シリーズである。その後、『二人はプリキュア』(二〇

〇四)も発表され、現在でもシリーズ化されている。

五 冒険する少女から闘う少女へ

文学の世界ではルイス・キャロル『不思議の国のアリス』(二八六五)、フランク・バウム『オズの魔法使い』(二九〇〇)のアリスやドロシーは冒険する女の子、少女として登場する。その後は児童文学における孤児文学の中で厳しい社会の中で翻弄されるバーネット『小公女』(二九〇五)、ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』(一九二二)、グレイ原作『アニー』(一九七七)、ロアルド・ダール『マチルダ』(二九八八)などの作品があり、少女はある意味ではいじわるな大人、世間、社会の慣習と闘っていた。日本では冒険する少女、闘う少女はどのようにして登場して来たのであろうか。日本の昔話では『竹取物語』『かぐや姫』や『鉢かづき』等もあるが、数は圧倒的に少ない。また、婚姻譚の分類に属

するものであるが、生き方をテーマにしたものである。これは当然、日本の近代化に伴う教育改革や少女雑誌による少女のイメージ作りなども無縁ではないだろう。「清く正しく美しく」を求める風潮がある一方、当時は平塚らいてう（一八八六—一九七二）に代表されるような「新しい女性」の台頭などがあつたことも周知の通りだ。文学作品との絡みから一つのヒントとして少年の冒険物ではあるが、ジュール・ヴェルヌ『十五少年漂流記』（一八八八）をひとつのモチーフにした作品も日本では枚挙かずおのマンガ作品『漂流教室』（『週刊少年サンデー』一九七二—一九七四年まで連載）、大林宣彦監督映画『漂流教室』（二九八七）、映画『喜多郎の十五少女漂流記』（二九九二）、テレビドラマ『ロング・ラブレター』（漂流教室）（二〇〇二）といった漂流冒険物の系譜がある。

実はこうした冒険する少女から闘う少女への変容

は日本社会における女性の地位向上やこれに関する世情とも大いに関連しているといってもよいだろう。法令的な面だけに目を向けてみると、一九七二年に勤労婦人福祉法、一九八六年には雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律、その後、一九九七年、一九九九年には雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律が施行された。特に一九九九年の法令では名称に関しても男性、女性を問わず性別を表す職種で募集することなどが謳われるようになり、その結果左記のようなことが起きたことは周知の通りである。

「営業マン」↓「営業職」

「保母」↓「保育士」

「看護婦」↓「看護師」

「スチュワーデス」↓「客室乗務員」

この影響があったかどうかはわからないが、スーパー戦隊ものの名称も『星獣戦隊ギンガマン』（一九九八）を最後に現在は○○レンジャーといった名称となっており、○○マンというスーパー戦隊名は登場していない。

六 チーム編成

欧米は個人主義、日本は集団主義といったような紋切型の考え方があり、このような戦隊ものを取り扱おうと必ずこれと結びつけようとする傾向がある。しかし、日本の戦隊ものの真髄はむしろラグビーの精神である All for One, One for All という考え方や武士道に代表されるような自己犠牲的なものと結びついているのではないかと思われる。一方、欧米でもクール・ジャパンの代表のようにして『美少女戦士セーラームーン』が人気があるのは、欧米ではこ

れまでなかった美少女が世界を救うために闘うという発想と制服ファッション、決め台詞とポーズなどが注目を浴びたのかもしれない。特にアメリカのヒーローものも、ひとりで闘う時代は終わったのではないかと思える。バットマンにロビンというアシスタントがつき、『Xメン』シリーズが定着したのをみると、仮想世界においても悪の組織が巨大になり過ぎると、フィクションの世界でもこれをひとりで闘うには？というところであろうか。日本のアニメではさらにこうした戦隊もの、戦闘美少女は低年齢化の傾向にあり、世界の運命を担い少年少女が闘うものを「セカイ系」と名付けている。RPGに代表されるゲームの世界では今やこれも定着している。

七 まとめ

欧米が生み出した冒険する女の子のジャンルは海を渡り日本に來ると戦闘美少女として発展し、そし

て今、クール・ジャパンを背負って欧米へ戦闘美少女たちの冒険が始まったと言ってもよいかもしれない。マンガやアニメの世界ではもはや女の子はもはや守られる存在ではない。社会における女性の進出と戦闘美少女は必ずしも無縁ではないだろう。リアル世界が仮想現実を与える影響はもちろんのこと、仮想現実がリアル世界を与える影響も無視できないのがこの二十一世紀の特徴なのかもしれない。

* 『青砥稿花紅彩画』の画像はインターネット上の

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9D%92%E7%A0%A5%E7%A8%BF%E8%8A%B1%E7%B4%85%E5%BD%A9%E7%94%BB> (二〇一

年十二月一日アクセス)より。